

パリからのレポート

WAttention パリスタッフより
写真提供：井関北斗

厳しい外出禁止令期間中のパリでは、あれほど人々との触れ合いを楽しむ、あるいは求める人々が驚くほどの忍耐強さを見せました。

都市としてのパリは、その長い歴史の中で、奇跡的に直接の戦禍に見舞われることが少なかった街です。とはいえ、人々は戦争や疫病の流行のたびに忍耐を強いられる暮らしを体験してきました。しかし、今回のコロナ禍による自宅拘束は、それまでの体験よりも更に厳しいものだったと言えるのではないのでしょうか？

通りから人の姿が消え、カフェは閉鎖されました。これは第二次大戦時ナチス占領下でもなかったことです。欧州各国がコロナ禍による事態を、「今は戦時下である」と称したのにはこうした歴史的背景と比較しても頷けるところです。



外出禁止令下では、必要最低限の買い物を含めて外出の際にはそのための証明書を提示できるようにしなくてはならず、それも特別な理由がない限り、自宅から1キロ以内の範囲に制限されていました。違反への罰則は厳しく、高い罰則金、さらには牢獄での拘束もあり得たわけです。

そうした生活が二か月にわたって続いたことで、外出禁止令が解除されたことを受けても、人々からは自宅拘束からの解放を爆発的に祝うという姿はありません。大丈夫なのだろうか？という疑心暗鬼と、自宅拘束を解かれたことの安堵感が入り混じる複雑な心境に置かれていると言っても良いでしょう。

禁止令下での買い物外出では、マスク姿に抵抗感があるほとんどの人々は、マスク着用しないまま外出していましたが、禁止令を解かれた今では多くの人々がマスク着用するようになっています。それどころか、マスク着用を義務付けて、それに反する場合の罰則規定を設けている場所もあります。



外出禁止令期間中は朝6時過ぎのメトロ10番で車両内に2~3人、RER B線5、6人、北駅から郊外への電車で普段の10分の1ほどの乗客数で、車内では外と比較して多くの方がマスクをしていましたが、やはり着用していない人の姿も少なくありませんでした。

禁止令が解かれ二週間を過ぎた今は、どの交通機関も通常の8割程度まで人々が戻ってきています。ですが、マスクをしていないと135€の罰金を取られるため、パリスタッフが良く使う経路では全員がマスク着用しているようです。

ですが、パリ周辺のいわゆる「バンリュー（郊外）」と呼ばれる地域ではマスク無しで乗客がどんどん乗り込んで来るので、とても危なくて電車を使う気になれないということでした。パリの街中は人出がかなり戻って来ています。とはいえ多くの方がマスクをしているので異様な光景とも言えますが...



何よりも、多くのカフェやレストランが閉じられている状態では、パリに生命の循環が戻ったとは言えません。ですが、「外出禁止令期間中は本当に空気が澄み、騒音もなく、僕の働いているアトリエ前には裏山からほぼ毎朝鹿が親子で降りてきていました。あの清澄さがなくなったのは少々残念にも思えます（スタッフ談）」それはひょっとする今回のコロナ禍がもたらした世界共通の感情なのかも知れません。

フランス語版編集部

* 写真は日本人が多く住むパリ15区の周辺です 撮影：井関北斗